

女性のことばと文末の言語形式

中 島 悦 子

1 はじめに

現代社会における話しことばの男女差という問題については、社会言語学や待遇表現研究の上からいくつかの実態調査と研究成果の報告がある（例えば井出1982・1986、川成1992）。話しことばの男女差は年々縮まり、中性化の傾向を予測する指摘もある（例えば『ことば』10、11、12、13号）。

しかしながらそれでもなお、男性的、女性的傾向というレベルの上で、それぞれの特徴が見いだせる。一般に丁寧な断定回避の間接的表現の方が女性的傾向として捉えられているようである。例えば相手に何かを頼む場合、次のような

(1) (録音) してください。

という直接的な依頼要求表現よりも、

(2) 申し訳ございませんが、(録音) していただけるとありがたいと思うんですけど……。

というような間接的な依頼要求表現の方が丁寧な表現となる。構文的に文末を言い切りの形にせず、「けど」等を加えて断定を回避したり、或は文頭に「申し訳ございませんが」というような言い訳や前置きをつけることによってあたりを柔らかくするのである。中島1994（以下前稿と呼ぶ）では、職場における女性の話しことばの実態を発話の文末に現れる言語形式に焦点を絞って調査・分析した。本稿は前稿に続くもので、同じく談話レベルでの文末の言語形式に焦点を絞り、一般家庭における女性の話しことばの実態を調査・分析することにする。

分析項目としては次の点を明らかにする。

(1) 文末の言語形式の現れ方の実態

(2) 文末の言語形式の世代差

(3) 文末の言語形式とあらたまり度（フォーマル・インフォーマルというあらたまりの程度をいう）との関連性

調査対象としては、資料「女性のことばと世代」（小林1992、1993）における鈴木さん一家（S家）の祖母（K 82歳）、母（C 53歳）、娘（M 20歳）と内藤さん一家（N家）の曾祖母（Y 89歳）・祖母（H 66歳）、父（N 49歳）・母（U 45歳）、娘（A 21歳）の老年・中年・若年の三世代および司会（S 40歳）のことばに限定した。

調査方法としては、S家・N家の談話資料に現れた実際の文末の言語形式を採取し、S家、N家ごとにその使用数と使用頻度とを<表2-1><表2-2>に示した。

2 文末の言語形式の現れ方の実態

例(2)のような断定を回避する文末の言語形式は、水谷（1985）の待遇表現の分類に従えば遠慮表現に相当する。水谷は遠慮表現を断定回避の(a)と(b)とに分け、(a)には「断定回避文末」（「じゃないでしょうか」等）と「省略」（「て」「から」止めで、後半を省略）を挙げ、(b)には「条件の仮定」によるもの（「もしお願いできましたらありがたいのですが」）や「前置き」（「ご無理とは思いますが」）等を挙げている。本稿ではこれらを踏まえて、S家・N家の談話資料に現れた文末の言語形式のタイプを次の<表1>のように分類する。<表1>はそれぞれの文末の言語形式を非断定回避型と断定回避型に分類し、丁寧度の強弱を順位によって示した。

< 表 1 >

〔文末の言語形式〕

1 依頼要求形式	
a 非断定回避型 (直接依頼要求形式)	(Ⅰ) 動詞命令形 (1) 動詞命令形(シロ) (2) ～ナサイ (Ⅱ) テ形 (3) ～テ (Ⅲ) テ形+「クレル」命令形 (4) ～テクダサイ (5) ～テクダサイマセ (6) オヘクダサイ
b 断定回避型 (間接依頼要求形式)	(Ⅳ) テ形+「イタダク」条件形 (7) ～テイタダケレバネ (8) ～テイタダケレバト思ッテ (9) ～テイタダケレバイインデスケド (10) ～テイタダケルトアリガタイト思イマス (Ⅴ) 条件形「タラ」「レバ」 (11) モシヨロシカッタラ…
2 疑問形式	
a 非断定回避型 (直接疑問形式)	(Ⅰ) 名詞・動詞+上昇イントネーション (1) 名詞(+助詞) (2) 動詞基本形 (3) ナイ形 (4) マス形 (5) マセン形 (Ⅱ) 「ノダカ」のダ/カ省略 (6) ノ (Ⅲ) 「デス・マス形」+カ (7) (ン)デスカ・マスカ
b 断定回避型 (間接疑問形式)	(Ⅳ) 「デショウ」付加 (8) ダロ (9) (ン)デショ (10) (ン)デショウ (11) (ン)デショウカ (Ⅴ) 否定形「ナイ」付加 (12) (ン)ジャナイ (13) (ン)ジャナイカ (14) (ン)ジャナイノ (15) (ン)ジャナイデスカ (16) (ン)ジャナイデショウカ
3 省略(未完結文)	
b 断定回避型	(Ⅰ) 条件形終止 (1) ～タラ (2) ～レバ (3) ～ト (4) ～ナラ(バ) (5) ～テモ (Ⅱ) ケレド形終止 (6) ～ケド(モ) (7) ～ケレド(モ) (Ⅲ) テ形終止 (8) ～テ (9) ～デ (Ⅳ) 理由の接続助詞終止 (10) ンデ (11) ノデ (12) カラ (13) シ (Ⅴ) 並立の接続助詞終止 (14) タリ (15) トカ (Ⅵ) 引用助詞+イウ終止 (16) ～ッテ (17) ～ッテイウ (18) ～ッテイウカ (19) ～トイウカ

<表1>におけるように、aの非断定回避文末は直接依頼要求形式と直接疑問形式の二つに分類され、bの断定回避型文末は間接依頼要求形式、間接疑問形式、省略（未完結文）の三つに分類される。bは水谷（1985）の指摘する待遇表現の中の遠慮表現に位置するものであり、aと比較するとより丁寧度の高い表現となる。

1 aの直接依頼要求形式は、(Ⅰ)動詞命令形、(Ⅱ)テ形終止、(Ⅲ)テ形＋「クレル」命令形とに分ける。

1 bの間接依頼要求形式は、(Ⅳ)テ形＋「モラウ」の受け手尊敬語「イタダク」条件形、(Ⅴ)条件形「タラ」「レバ」止めによる前置きとに分ける。

(Ⅳ)は更に、(7)「テイタダク」条件形止め(「テイタダケレバ」)、(8)「テイタダク」条件形＋ト思(「テイタダケレバト思ッテ」)、(9)「テイタダク」条件形＋評価＋ケド(「テイタダケレバイインデスケド」)、(10)「テイタダク」条件形＋評価＋ト思イマス(「テイタダケルトアリガタイト思イマス」)等に細分される。つまり依頼要求の断定回避文末は構文的には、1 テ形＋「モラウ」の受け手尊敬語「イタダク」条件形、2 評価を表す「イイ」「アリガタイ」付加、3「ケレド(モ)」止め、4 思考を表す「ト思イマス」付加等から成り立つ。1～4の言語形式のいずれかを加えることによって断定的な調子を避け、丁寧な表現となる。丁寧度の強弱は、相手に直接動作の依頼要求をする非断定回避型の(Ⅰ)動詞命令形が最も丁寧度が弱く、断定回避型の(Ⅱ)条件「タラ」形止めによる前置きが、後件の省略と相俟って最も丁寧度が強まる。つまり丁寧度の弱から強への程度は、(Ⅰ)動詞命令形→(Ⅱ)テ形→(Ⅲ)テ形＋「クレル」命令形→(Ⅳ)テ形＋「モラウ」の受け手尊敬語「イタダク」条件形→(Ⅴ)条件形「タラ」「レバ」による前置きという順序で示される。

以下に依頼要求形式の用例を示しておく。(3)～(7)が非断定回避型依頼要求形式、(8)～(12)が断定回避型依頼要求形式である。

(3) 熱いの いれろや (1129Y01)

(4) おばあちゃん これ これ いれて (067H01)

- (5) 先生 お砂糖 いれてください (068Y01)
- (6) どうぞ めしあがってくださいませ (596K01)
- (7) あの たいしたものじゃなくて もうしわけないんですけども お
つかいください。(869S01)
- (8) …気がついたこととか おっしゃっていただければね… (1251S02)
- (9) もう 雑談というか していただければと思って (114S01)
- (10) …感想みたいなことをいっていただければいいんですけども
(1133S01)
- (11) ご自由に あの 発言をしていただけるとありがたいと思います
(118S02)
- (12) もし よろしかったら… (060H01)

次に、2 a の非断定回避型疑問形式には (I) 名詞・動詞に上昇イントネーションを付加して疑問を表す形式 (終助詞「カ」を付けない)、(II) 「ノ」をつけて疑問を表す形式 (この場合の「ノ」は「ノダカ」の「ダ」「カ」の省略形とする)、(III) 「デス・マス」体に「カ」をつけて疑問を表す形式等がある。

2 b の断定回避型疑問形式には (IV) 「ダロウ」「デショウ」に上昇イントネーション (↑) 或は「カ」をつける形式、(V) 否定形「ナイ」付加形式によるもの等がある。(V) は更に、(12) 「(ン) ジャナイ↑」、(13) 「(ン) ジャナイカ↑」、(14) 「(ン) ジャナイノ↑」、(15) 「(ン) ジャナイデスカ↑」という否定形+上昇イントネーション形式等と(16) 「(ン) ジャナイデショウカ」という否定形+「デショウ」+「カ」形式がある。疑問形式の断定回避文末は構文的には、1 否定形「ナイ」、2 「ダロウ」「デショウ」、3 疑問の終助詞「カ」等の付加から成り立つ。つまり肯定の疑問形より否定の疑問形の方が、また間接的に相手の意向を問う「ダロウカ」「デショウカ」形式の方が、より丁寧で婉曲な表現となる。疑問形式の丁寧度の強弱は非断定回避型の(1)名詞+上昇イントネーション形式が最も丁寧度が弱く、断定回避型の(16)否定形+「デショウ」+「カ」形式(「ンジャナイデショウカ」)

が最も丁寧度が強い。従って丁寧度の弱から強への程度は(1)→(16)へと順次示される。その用例を次に挙げる。(13)～(19)が非断定回避型疑問形式、(20)～(26)が断定回避型疑問形式である。

- (13) アナウンサー? (1283S01)
- (14) ちゃっかりって言葉 つかう? (1230A02)
- (15) 眼鏡はいらない? (1134A01)
- (16) お母さんはどう 抵抗あります? (1299S02)
- (17) あ そう いうの? (1695H01)
- (18) あ 抵抗 ありますか (1299S01)
- (19) 上の学校も いうんですか? (029K02)
- (20) でも まだ 若い…でしょ? (103N01)
- (21) そうすると ご自分は あまり 見込みないんでしょう? (446S01)
- (22) さあ どうなんでしょうか (1109A01)
- (23) 電話してんじゃない? (1610N01)
- (24) いったこと ないんじゃないの? (1384H01)
- (25) 違和感って 我々くらいが 感じるんじゃないですか (813N01)
- (26) …口調の関係してるんじゃないでしょうかねえ (451M02)

3の断定回避文末形式の省略(未完結文)とは、「テ」「ノデ」「カラ」「ケド」「タラ」等で導かれる従属節だけで文を止め、主節の帰結部分を省略することによって断定を回避する表現方法である。省略した帰結部分を相手の判断に委ねるような曖昧な表現の方が丁寧で婉曲な表現となる。省略の断定回避文末は、(Ⅰ)条件形「タラ」「レバ」「ト」「ナラ」終止(用例(27)～(30))、(Ⅱ)ケド・ケレド(モ)終止(用例(31))、(Ⅲ)テ形終止(用例(32))、(Ⅳ)理由の接続助詞「ノデ」「カラ」「シ」終止(用例(33)～(36))、(Ⅴ)並列の接続助詞「タリ」「トカ」終止(用例(37)(38))、(Ⅵ)引用助詞「ト」+イウ(カ)(ッテ)終止(用例(39)～(42))等が挙げられる。省略形式に関しては丁寧度の強弱は同等とする。省略の用例を挙げておく。

- (27) あたしとかいなくて あたしの友達からとか 電話 かかってきたら (817M01)
- (28) どんなふうに たとえば 具体的に いえば (723S01)
- (29) 男のかたも 女のかたも 差別ないような言葉をね つかわれると (343K01)
- (30) さきほどから きいてても (340S01)
- (31) これは 図書券なんですけれども (869S01)
- (32) そのあとは ご家庭に はいられて (401S01)
- (33) ふだん そんな いいかた してるんで (128N01)
- (34) どうぞ 伊豆からおくってきた新茶 あけましたので (295K01)
- (35) もう それは 時代が かわっていくから (413S01)
- (36) 時代がかわってきたし しつけもちゃんとできてないし (322C02)
- (37) 本局 いったり (423H01)
- (38) なんか いいあらわしかたとか (496S03)
- (39) で ごめんね うち いらないのって (1687U02)
- (40) …どっちが どうだか わかんないっていう (603H04)
- (41) 丁寧っていうか うーん (379M01)
- (42) とくに 気にする必要もないというか (293S01)

3 文末の言語形式と世代差

S家、N家の三世代および司会者(S)の発話における文末の言語形式の使用数と使用頻度をまとめると<表2>のようになる。S家を<表2-1>、N家を<表2-2>に示す。

<表 2-1>: 「S 家」

	K		C		M		S		計	
	数	対全文 比 (%)	数	対全文 比 (%)	数	対全文 比 (%)	数	対全文 比 (%)	数	対全文 比 (%)
1 依頼要求形式										
a 非断定回避型 (直接依頼要求形式)										
(1) シロサイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(2) ナナサイ	0	0	1	0.25	0	0	0	0	0	0
(3) テクダサイ	0	0	1	0.25	3	1.5	0	0	4	0.3
(4) テクダサイマセ	0	0	2	0.5	0	0	2	0.6	4	0.3
(5) オ〜クダサイ	1	0.3	0	0	0	0	0	0	1	0.1
(6) オ〜クダサイ	0	0	0	0	0	0	1	0.3	1	0.1
計	1	0.3	4	1.0	3	1.5	3	0.9	10	0.8
b 断定回避型 (間接依頼要求形式)										
(7) テイタダケレバ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(8) テイタダケレババト思ッテ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(9) テイタダケレババイヤイデンスケド	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(10) テイタダケレババアリガタイト思いいマス	0	0	0	0	0	0	2	0.6	2	0.2
(11) モシヨロシカッタラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	2	0.6	2	0.2
2 疑問形式										
a 非断定回避型 (直接疑問形式)										
(1) 名詞 (+助詞) ↑	0	0	0	0	1	0.5	24	7.2	25	2.0
(2) 動詞基本形 ↑	2	0.7	1	0.25	3	1.5	0	0	6	0.5
(3) ナイ ↑	3	1.1	3	0.8	2	0.9	4	1.2	12	1.0
(4) マス ↑	0	0	2	0.5	0	0	12	3.6	14	1.2
(5) マセン ↑	0	0	0	0	0	0	3	0.9	3	0.2
(6) ノ ↑	1	0.3	1	0.1	1	0.5	0	0	3	0.2
(7) (ン) デスカ・マスカ	4	1.5	7	1.8	0	0	62	18.6	73	6.1
計	10	3.6	14	3.5	7	3.4	105	31.5	136	11.3

		K		C		M		S		計	
		数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)
b 断定回避型 (間接疑問形式)											
(8)	ダロ	0	0	0	0	3	1.5	0	0	3	0.2
(9)	(ン) デシヨウ	6	2.2	4	1.0	0	0	2	0.6	12	1.0
(10)	(ン) デシヨウカ	1	0.3	0	0	1	0.5	2	0.6	4	0.3
(11)	(ン) デシヨウカ ↑	0	0	0	0	0	0	1	0.3	1	0.1
(12)	(ン) ジャナタイ ↑	0	0	0	0	3	1.5	0	0	3	0.2
(13)	(ン) ジャナタイカ ↑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(14)	(ン) ジャナタイ ↑	1	0.3	0	0	0	0	0	0	1	0.1
(15)	(ン) ジャナタイデスカ ↑	0	0	0	0	1	0.5	0	0	1	0.1
(16)	(ン) ジャナタイデシヨウカ	0	0	0	0	2	0.9	0	0	2	0.2
計											
		8	2.8	4	1.0	10	4.9	5	1.5	27	2.2
3 省 略											
b 断定回避型											
(1)	タラ	0	0	1	0.25	3	1.5	2	0.6	6	0.5
(2)	レバ	1	0.3	1	0.25	1	0.5	1	0.3	4	0.3
(3)	ト	2	0.7	4	1.0	0	0	2	0.6	9	0.7
(4)	ナラ (ハ)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(5)	デモ	0	0	23	5.8	9	4.4	3	0.9	45	3.7
(6)	ケレ (モ)	1	0.3	8	2.0	0	0	10	3.0	19	1.6
(7)	ケレド (モ)	5	1.8	8	2.0	3	1.5	13	3.9	29	2.4
(8)	デ	2	0.7	3	0.8	2	0.9	2	0.6	9	0.7
(9)	デン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(10)	ノ	1	0.3	2	0.5	0	0	2	0.6	5	0.4
(11)	カ	8	2.9	4	1.0	1	0.5	1	0.3	14	1.2
(12)	カリ	3	1.1	5	1.2	2	0.9	0	0	10	0.8
(13)	タ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(14)	タリ	0	0	5	1.2	2	0.9	8	2.4	15	1.3
(15)	ッテ	2	0.7	1	0.25	0	0	0	0	3	0.2
(16)	ッテイ	0	0	2	0.5	0	0	0	0	2	0.2
(17)	ッテイウ	0	0	4	1.0	5	2.5	0	0	9	0.7
(18)	ト	0	0	0	0	0	0	3	0.9	3	0.2
(19)	トイウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計											
		35	12.4	71	17.8	29	14.1	49	14.7	182	15.0

<表 2-2> : 「N家」

	Y		H		N		U		A		S		計	
	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)
1 依頼要求形式														
a 非断定回避型 (直接依頼要求形式)														
(1) シロ	2	0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.1
(2) ナサイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(3) テクダサイ	1	0.2	5	1.0	0	0	0	0	3	2.7	0	0	9	0.4
(4) テクダサイマセ	3	0.7	1	0.2	0	0	1	0.3	1	0.9	0	0	6	0.3
(5) オヘクダサイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(6) オヘクダサイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	6	1.3	6	1.2	0	0	1	0.3	4	3.6	0	0	17	0.8
b 断定回避型 (間接依頼要求形式)														
(7) テイタダケレバ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	1	0.05
(8) テイタダケレバト思ッテ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	1	0.05
(9) テイタダケレバイデンデスケド	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	1	0.05
(10) テイタダケレバアリガタイト思 イマス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.4	2	0.1
(11) モシヨロシカッタ	1	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.05
計	1	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1.0	6	0.3
2 疑問形式														
a 非断定回避型 (直接疑問形式)														
(1) 名詞 (+助詞) ↑	0	0	7	1.4	2	1.3	4	1.2	2	1.8	16	3.0	31	1.5
(2) 動詞基本形 ↑	0	0	4	0.8	0	0	2	0.6	3	2.7	1	0.2	10	0.5
(3) ナイ ↑	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.9	1	0.2	2	0.1
(4) マス ↑	0	0	0	0	0	0	2	0.6	0	0	13	2.5	15	0.7
(5) マセン ↑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(6) ノ ↑	0	0	6	1.2	0	0	1	0.3	0	0	0	0	1	0.4
(7) (ン) デスカ・マスカ	2	0.4	3	0.6	3	1.9	5	1.5	1	0.9	58	11.1	71	3.4
計	2	0.4	20	4.0	5	3.2	14	4.2	7	6.3	90	17.2	138	6.7

	Y		H		N		U		A		S		計
	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	数	対全文 数 (%)	
b 断定回避型 (間接疑問形式)													
(8) ダロ ↑	2	0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.1
(9) (ン) デシヨウ ↑	6	1.3	3	0.6	2	1.3	2	0.6	2	1.8	0	15	0.7
(10) (ン) デシヨウウカ ↑	0	0	0	0	0	1.3	1	0.3	1	0.9	0	2	0.1
(11) (ン) デシヨウウカ ↑	0	0	0	0	2	1.3	0	0	1	0.9	0	3	0.15
(12) (ン) ジャナイ ↑	2	0.4	5	1.0	6	3.8	0	0	3	2.7	0	16	0.8
(13) (ン) ジャナイカ ↑	0	0	0	0	1	0.6	0	0	0	0	0	1	0.05
(14) (ン) ジャナイノ ↑	2	0.4	2	0.4	0	0	0	0	0	0	0	4	0.2
(15) (ン) ジャナイデスカ ↑	0	0	0	0	1	0.6	0	0	4	3.6	0	5	0.2
(16) (ン) ジャナイデシヨウカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	12	2.5	10	2.0	12	7.6	3	0.9	11	10.0	0	48	2.3
3 省 略													
b 断定回避型													
(1) タラ	0	0	1	0.2	0	0	0	0	1	0.9	2	4	0.2
(2) レバ	0	0	4	0.8	0	0	0	0	0	0	2	6	0.3
(3) ト	3	0.7	2	0.4	2	1.3	6	1.8	2	1.8	3	18	0.9
(4) ナラ (バ)	0	0	1	0.2	0	0	1	0.3	0	0	0	2	0.1
(5) テモ	5	0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.1
(6) ケド (モ)	5	1.1	23	4.8	7	4.5	6	1.8	13	11.8	14	68	3.3
(7) ケレト (モ)	2	0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	8	10	0.5
(8) テ	28	6.4	15	3.0	4	2.5	9	2.6	4	3.6	17	77	3.7
(9) デ	14	3.2	5	1.0	3	1.9	4	1.2	2	1.8	12	40	1.9
(10) シ	1	0.2	0	0	1	0.6	0	0	1	0.9	1	4	0.2
(11) ノデ	0	0	0	0	0	0	12	3.5	1	0.9	3	16	0.8
(12) カデ	16	3.6	15	3.0	4	2.5	6	1.8	1	0.9	7	57	2.8
(13) シ	5	1.1	1	0.2	1	0.6	0	0	5	4.5	1	13	0.6
(14) タリ	1	0.2	2	0.4	0	0	0	0	0	0	0	3	0.15
(15) トカ	1	0.2	9	1.8	0	0	0	0	1	0.9	8	20	1.0
(16) ッテ	8	1.8	12	2.4	0	0	1	0.3	1	0.9	0	24	1.2
(17) ッテイウ	1	0.2	3	0.6	1	0.6	2	0.6	1	0.9	0	11	0.5
(18) ッテイウカ	0	0	1	0.2	1	0.6	0	0	0	0	3	5	0.2
(19) トイウカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.1
計	87	19.5	94	19.0	24	15.2	50	14.7	41	37.1	86	382	18.5

<表2-1><表2-2>に示したS家・N家における「老」(S家K、N家Y・H)、「中」(S家C、N家N・U)、「若」(S家M、N家A)の三世代の文末形式を1 依頼要求形式、2 疑問形式、3 省略の順に見て行く(司会者(S)は除外して考察する)。

1の依頼要求形式のa非断定回避型について見ると、「老」がより多く使用するタイプは、(4)段階の「テクダサイ」でN家Yが3例0.7%、Hが1例0.2%となっている。(3)段階の「テ」もHが5例1%、Yが1例0.2%ある。その他(5)の「テクダサイマセ」はS家Kが1例0.3%、(1)の動詞命令形はN家Yが2例0.4%となる。「老」世代では、(3)(4)段階のタイプ「テ」「テクダサイ」がよく使われることが知られる。このうち最も丁寧度が弱い動詞命令形の使用はこの地方独自の老世代の言い方と思われ、比較の対象からはずす。「中」がより多く使用するタイプでは、(4)の「テクダサイ」がS家Cが2例0.5%、N家Uが1例0.3%となっている。つづいて(3)の「テ」(2)の「ナサイ」がS家Cの1例0.25%ある。「中」では両家とも(4)段階の「テクダサイ」がより多く使われている。「若」が使用するタイプは、(3)の「テ」がM・Aともに3例、対全文数比は各々1.5%、2.7%となっているが、(5)の「テクダサイ」はAの1例0.3%しかない。aの非断定回避の直接依頼要求形式の中では、三世代に共通して使われるタイプは(4)段階の「テクダサイ」で、比較的「老」世代に多い。最も使用率の高いタイプは(3)段階の「テ」で、比較的「若」世代に多い。しかしbの断定回避型の依頼要求形式の使用はS家N家の三世代とも皆無である。家族内の極めてインフォーマルな談話においては、待遇表現中の遠慮表現に当たる間接依頼要求形式は世代の別なく使用されていない。従って依頼要求形式は、傾向としては三世代とも非断定回避型の(3)(4)段階の「テ」「テクダサイ」を最もよく使い、断定回避型は使わないということが実証される。

2の疑問形式のa非断定回避型については、両家の「老」がより多く使用するタイプは(7)段階の「デスカ・マスカ」で、S家Kが4例1.5%、N家YとHが5例1%となっている。但し個人差もあり、特にN家のHは(1)の「名

詞↑」7例 1.5%、(6)の「ノ↑」6例 1.2%、(2)の「動詞基本形↑」4例 0.8%と満遍なく使用している。「中」がより多く使うタイプも(7)の「デスカ・マスク」でS家Cが7例 1.8%、N家NとUが8例 3.4%と最も多い。次いで(1)の「名詞↑」がN家のNとUで6例 2.5%となる。「若」でより多く使用するタイプは、(2)の「動詞基本形↑」がM・A計6例 4.2%と最も多く、次に(1)の「名詞↑」がMとAが3例 2.3%となる。(7)の「デスカ・マスク」は「若」では1例もない。非断定疑問形式は、「老」「中」が(7)の「デスカ・マスク」をより多く使い、「若」は最も丁寧度の低い(1)(2)「名詞・動詞↑」をより多く使うという傾向があると言える。女性的な文末形式「ノ↑」の使用は「老」世代のN家Hに多いという傾向があるが、「中」「若」は各1例ずつしかない。「中」「若」世代において、中立的な「デスカ・マスク」と「デスカ・マスク」の省略形である「名詞・動詞↑」の使用がより多く、女性的な「ノ↑」の使用がより少ないことは注目されてよい。

2bの断定回避型の疑問形式については、「老」がより多く使うのは(9)の「(ン)デショ↑」で、S家Kが6例 2.2%、N家Y・Hが9例 1.9%となっている。次いで(12)の「(ン)ジャナイ↑」がN家YとHが計7例 1.4%あり、またそれに「ノ」のついた(14)の「(ン)ジャナイノ↑」は老世代のみで、Kが1例、Y・Hが計4例 0.8%となっている。「中」では、(12)の「(ン)ジャナイ↑」がN家男性Nが6例 3.8%とより多く使用している。男性Nの疑問形式の使用率が男性的な(13)の「(ン)ジャナイカ↑」(1例 0.6%)より、中立的な「(ン)ジャナイ↑」の方が高いことは注目される。「若」がより多く使うタイプも(12)の「(ン)ジャナイ↑」で、Mが3例 1.5%、Aが3例 2.7%ある。また2bの断定回避型疑問形式では一番丁寧度の低い(8)の「ダロ↑」はS家Mに3例 1.5%、N家Yにも2例あり、「若」「老」に使われている。また丁寧度の高い(15)の「(ン)ジャナイデスカ」は、Mに1例 0.5%、Aに4例 3.6%というように「若」世代にあり、「老」「中」世代には見られない。三世代に共通して使用される2bの断定回避型疑問形式は、(12)の「(ン)ジャナイ↑」、(9)の「(ン)デショ↑」で、(12)は「老」に、(9)は「若」に比較

的多いという傾向が見られる。2の疑問形式のa非断定回避型とb断定回避型とを比較すると、「老」「中」では傾向としてはaの非断定回避型の方がやや多く、「若」では逆にbの断定回避型の方が多い。これは丁寧度の差というより、「若」世代に「(ン) ジャナイ (デスク)」が多用される傾向が見られるからであろう。疑問形式においても、インフォーマルな家族内の談話ではaの非断定回避型の方がより多く使用される傾向があることが分かる。

断定回避型文末形式に分類される(3)の省略、いわゆる未完結文は、丁寧度のレベルは同等と考えられる。従って(1)の条件形「タラ」終止から(9)の「トイウカ」終止までのレベル差はないものとする。

「老」により多いタイプは、「テ」終止でN家Yが28例 6.4%、Hが15例 3.0%ある。次いで「カラ」終止がS家Kが8例 2.9%、N家Yが16例 3.6%、Hが15例 3.0%となっている、「ケド」終止も「老」では比較的比率が高い。「中」により多いタイプは、「ケド」終止で、S家Cが23例 5.8%、N家ではN・U計13例 6.3%となっている。次いで「ノデ」終止がN家Uに12例 3.5%ある。「若」では、「ケド」終止がS家M 9例 4.4%、N家Aが13例 11.8%と最も高率である。次いで「ッテイウカ」終止がS家Mに5例 2.5%ある。しかし若者ことばと言われる「トカ」終止は、S家Mが2例 0.9%、N家Aが1例 0.9%と「若」世代では低率で、むしろ「老」「中」世代の方が9例 1.8% (H)、5例 1.2% (C) とより多い。

以上から三世代に共通してより多く使用される省略のタイプは、「ケド」終止と「テ」終止であることが分かる。また理由の文末終止では、「カラ」終止が「老」により多いという傾向がある。更に条件形では、書きことばに多いとされる「ト」で文を終止するタイプが各世代に共通して使われている。

4 文末形式とあらたまり度

文末の言語形式とあらたまり度との関連性という点については、「あらたまり度の強いものほど丁寧な文末形式が多く出現する」という仮説を提起し、(1) S家対N家 (2) S家・N家の家族対司会者Sのことばを検証する。

<表3>はS家・N家と司会者のa非断定回避型文末とb断定回避型文末の出現率である。

<表3>

	S家	N家	司会者S	
1 依頼要求形式			対S家	対N家
a 非断定回避型	1.4%	1.8%	0.9%	0%
(1) テ	0.9%	1.3%	0%	0%
(2) テクダサイ	0.5%	0.5%	0.6%	0%
(3) オ〜クダサイ	0%	0%	0.3%	0%
b 断定回避型	0.2%	0%	0.6%	1.0%
(4) テイタダケレバ	0%	0%	0%	0.2%
(5) テイタダケレバト思ッテ	0%	0%	0%	0.2%
(6) テイタダケレバイインデスケド	0%	0%	0%	0.2%
(7) テイタダケレバアリガタイト思イマス	0%	0%	0.6%	0.4%
(8) モシヨロシカッタラ	0.2%	0%	0%	0%
2 疑問形式				
a 非断定回避型	3.4%	4.4%	29.4%	16.9%
(1) 名詞 ↑	0.5%	1.4%	7.2%	3.0%
(2) 動詞基本形 ↑	0.8%	1.3%	0%	0.2%
(3) 動詞マス形 ↑	0.5%	0.6%	3.6%	2.5%
(4) デスカ・マスカ	1.6%	1.1%	18.6%	11.2%
b 断定回避型	3.9%	5.6%	0.6%	0%
(5) (ン) デショ ↑	1.6%	1.1%	0.6%	0%
(6) (ン) ジャナイ ↑	1.5%	2.0%	0%	0%
(7) (ン) ジャナイノ ↑	0.3%	0.4%	0%	0%
(8) (ン) ジャナイデスカ	0.5%	2.1%	0%	0%
3 省略				
b 断定回避型	9.1%	15.2%	8.1%	11.1%
(1) ケド	4.6%	4.8%	0.9%	2.6%
(2) テ	1.7%	3.6%	3.9%	3.2%
(3) カラ	1.4%	3.8%	0.3%	3.2%
(4) ノデ	0.4%	2.2%	0.6%	0.6%
(5) トカ	1.0%	0.8%	2.4%	1.5%

1 依頼要求形式における a の非断定回避文末は、S 家対 N 家では N 家の方が使用率がやや高い。特に最も丁寧度の低い「テ」形の使用率の高さが N 家に目立つ。S 家 N 家の家族対司会者では司会者の方が使用率が低い。特に丁寧度の低い「テ」形の使用は S 家が 1.4%、N 家が 1.8% であるが、司会者は 0% である。1 a の非断定回避型依頼要求形式におけるあらたまり度の強弱は S 家 > N 家、司会者 > S 家 N 家となる。1 b の断定回避型依頼要求形式においては、S 家の方が N 家より使用率が高い。それも最も丁寧度の強い「モシヨロシカッタ」の使用率においてである。家族対司会者について見ると、S 家 N 家より司会者の方が使用率が高い。従って b の断定回避型依頼要求形式におけるあらたまり度は S 家 > N 家、司会者 > S 家 N 家となる。つまり 1 の依頼要求形式においては家族対家族では S 家の方が、また家族対司会者では司会者の方があらたまり度が高く、あらたまり度の高いものほど丁寧な言語形式が使用されている。

2 の疑問形式においては、a の非断定回避文末の使用率は S 家対 N 家では N 家の方が高く、S 家 N 家対司会者では司会者の方がはるかに使用率が高くなっている。あらたまり度は家族対家族では S 家 > N 家となり、1 の依頼要求形式と同様の傾向を示す。しかし家族対司会者では S 家 N 家 > 司会者となり、あらたまり度は家族の方が高くなる。但し a をレベル別に見ると、より丁寧度の高い「デスカ・マスカ」「マス↑」では司会者の方が高率で、丁寧度の低い「動詞基本形↑」では家族の方が高率である。しかしながら 2 b の断定回避型疑問形式においては、S 家対 N 家では N 家の方が使用率が高い。また家族対司会者では家族の方が使用率が高い。つまりあらたまり度は N 家 > S 家、家族 > 司会者となる。また 3 の省略に関しても、S 家対 N 家では N 家の方が使用率が高く、家族対司会者では家族の方が使用率が高くなっている。このような 2 の疑問形式や 3 の省略に現れる現象は 1 の依頼要求形式に現れる現象とは相反するものである。とすると家族という内の領域において話されることばをインフォーマルであらたまり度が弱く、初対面で家族外の領域にある司会者のことばをフォーマルであらたまり度が強いと単純に捉え

ることはできない。中島（1993）でも指摘したが、言語形式とあらたまり度との関連性は言語使用の場における発話者と相手との関係を更に細かく考慮しなければならない。例えば年齢関係、つきあい年関係、接触量、親疎関係等のさまざまな条件を踏まえて分析する必要があるためである。これらについては次回の検討課題にしたいと思う。

<参考文献>

- 井出 祥子（1982）「待遇表現と男女差の比較」（『日英語比較講座5 文化と社会』大修館書店）
- 〃 （1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
- 遠藤 織枝 他（1989～1992）「共同研究・女性の話しことば」（『ことば』10～13号 現代日本語研究会）
- 川成 美香（1992）「発話行為のタイプと丁寧度の男女差」（『ことばのモザイク』ML S（目白言語学会））
- 小林美恵子（1992・1993）「資料・女性の話しことばと世代」（『ことば』13・14号 現代日本語研究会）
- 中島 悦子（1994）「発話の文末に現れる言語形式」（『職場における女性の話しことば』財団法人東京女性財団1993年度助成研究報告書）
- 水谷 信子（1985）『日英比較 話しことばの文法』（くろしお出版）
（国士館短期大学）